雙玉傳

二
五

へ13
2898
10

長門 尾定 寿

近世雲晴間雙玉傳第二輯卷之五

播陽　宮田南北編次

第十九回

賊子痴奸と害〜と名刀舊主ふうぶ

却説堅隅隠岐公へ賊と拿逃せ〜のみあるおそば用人ある浮木亀太夫まで。やう〜と殺されうれべ心の内安うすとしつくも。よ〜と室町家へ訪へゆ〜。原來約束の縁あまべ。揖五郎と召出し。賞銭〜て白銀百枚。ぶ〜〜〜て遁ゑうれべ揖五郎ハ大ようろこび。飛がで〜ホ晋街ホ立うう。母七草ホ悠々とよ〜と語りて那百枚の銀子と見せうれべ七草頻りホ点頭のゑ。スさうふ

昭和九年七月四日 閲了

門へ13
號2898
卷10

見うくらす。揖五郎ふ向ていふやう。開方ぢ老爺の檜垣屋どのゝ兵庫一二の持九ゑ。鄙言ふいふでゝ。親の東西ハ子の東西ゝや。勘當ハ受くれども。原真實の親子ふあゝずや。密ふ兵庫ふ立うう。ゆりと窺ひ忍び入ゝ手謀と以て四金數多。奪取てうゝべゝ。非徐絆の頭ゝゝゝて。他の家ふゝ拿ゝうゝと。又格別ふ罪軽うう。家内ゆ案次も開方ぢ行べ。又誤ハあうべゝゝず。心得ゝうゝと哄誘せべ揖五郎ハ手と組で。思案する支半時ぢうう。やりゝふゝて頭とふりあげ。母刀自の仰左即妙ゝさゝゝぶ是ゝう兵庫へゝう。天晴勝刹と得てうゝらん。ゝゝ又早ゝ家内の者ふ見咎らうゝ絆あうゝも。母鼓子花ふ恁々と。空言と喰ゝと欺あべ。百両ぢゝひハ設うべゝ。

必ず案ぢゝさゝゝれあと。云つゝ早ゝ座とゝつゝ儀ふその准備とゝ。兵庫の方へ立ゝう。不原丑ゝつの比及ふ。門口ゝう檜垣屋の内の体と窺ふ寂然ゝゝて寢入ぢゝ。心得ゝうゝと揖五郎ハ裏へ巡つて屑の内ゝう。悄々地ふ忍び入ゝうゝう。案次覚へゝ吾内あれど。殺ふ心ハ闇まぎれ。初盗の足元も。七三五定りね土庫の戸排とゆふら推ぢも引ぢも。毫とも動ゝ絆あうれば揖五郎大ふ困ぢ果恁てふ首尾全乱いぢハせんと。まゝゝ兵兵と外様の戸とそろゝと引あゝゝゝべ。僥倖ふゝてあきゝうゝう。扶足ゝつゝ内ふ入ゝう。交舩十郎ぢ枕方ある。何日も黄金と入ゝうゝる。草笥とゆふら引開ゝく。見まども見へぬ烏羽玉ふ。牽察て見まどあさゝ什あや。這体ゝて

一両も。黄金の包ハあるうろ。揖五郎心中ます〳〵あらて。尚隈もあ〳〵牽察しふ。手先ふ當るものこそあり。要こそあらゆ〳〵引出し。あちこち撫て見るふ。是ぞ握り覚のある。雄竜丸ぞと猜〳〵てぞれば。是あそ誠ふ三千両母七草のあつらへ。是ハ。是ふ〳〵あると心の笑壷。壷とうぐるぬさきふこそ。早く此家を逃出べ〳〵と。足元あぐろふ。再外の方ふ出ふろう。不原揖五郎逃去て。程もあらせず主船十郎。ふ解ふ行んとて。起ふ〳〵しぶこへつふ。外様既ふ開てあり。船十郎大ふ驚き。まづ消かゝ〳〵行燈の火を掻立て四下と見るふ。黄金草笥ハ錠排と。操切〳〵引箱の外あるもの。そこ〳〵四下ふ取ひろげ。狼籍云べらもあらされば。船十郎大ふ驚き。盗賊入ふ〳〵と二声三声呼ひうれハ家内共者驚き騒ぎ。鼓子花もよう〳〵と。手燭を持て出く來つ。原來打よう〳〵評議するふ。賊ハ早く逃のびて。今ハ追て益ハあるまし。僥倖ふて這箪笥ふ。黄金一包もあらざれども。大支の名刀を入置ふ。それの心ぐるとて。隈あ〳〵きぐ〳〵ふれど。悲しや刀ハ早くも失て。そこ〳〵四下ふ無うる。船十郎大ふ悲き。喪神傍大切ある。雄竜丸と拿ぞ〳〵。那刀ハ吾ふ〳〵ぞや。三千金ふ〳〵求ゆ〳〵呼又世ふ蓮流ある東西と。一回あらず二回まく〳〵。賊ふ拿ぶ〳〵といふ〳〵。誰ふ信真と思ふべきぞ〳〵詰〳〵ハ此由を大丹戻へ閃きあ。那里の縁弁忽ち絶て。我家の

七ゝ九

酬雖乃
ときわ名
乃不請
その主か
このえる
ゝ九

破断とも。あり行人もとろかこうう。悲ひ変とゝてぞうと。漢息ゝて止ざると。鼓子花もぐめ家隷擢ハ。縫解ハ仰まで慰ゝて。共ふ案察ふられゝうゝう。不題其夜も評議ふ明て翌朝まぐきょう。此由縣裏へ訴へゝう。去程ふ楫五郎ハ。夜と次で浪花津ふ立ゝう。母七草ふヤ中ゝう。小可夕べ怎々ゝて。親仁ふ枕方なる。黄金算筒を撫ゝ見ゝゝ。黄金ハ一両もひゝゝ其ゝゝふハ世ふ希ある大黄金品を拿來ゝゝ。是見玉へと七草ぐ。まゝへぇぐゝゝゝと出ゝふゝ。是即別品ゝゝゝ。雄竜丸の名刀ゝ。七草ハ扶放ゝ。打ゝゝゝ。遂と改め又鞘ふ収ゝゝふ小膝をすりよせ。开方ハ此名刀の。直高價とゝゝまゝ知ゝゝやと。

云ゝ楫五郎肩ゝゝゝ。知ゝゝゝゝゝゝ其名刀と。棄ゝゝゝゝ。
憚りゝゝゝ三千金ふハ時と不選買人ゝゝ。母刀自何と小可ぐ。
功立と賛てゝゝゝずやと。飽ゝゝゝ誘る廣言ふ。七草も大ふよろ
こびよゝゝゝゝ拿ゝゝゝゝゝ得ゝゝゝゝ。嵐と拿ゝ野旋
猫と。賛ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。不題七草と楫五郎ハよろこび
の祝ひ酒とて。俄ふ生洲へ人と走らせ。酒肴と拿つ楫五郎ぐ合
方ある弥生と喚做曲楽妓とゝゝゝ。日頃馴染の仲間。封巾間五
六人と召來ゝ。大ふ酒宴とゝゝゝゝ。美ふまゝ紫它二郎行
竜ハ。異女ふゝゝれゝゝゝ。兵庫ある檜垣屋へ人と偏て遣ゝゝかき
ゝる。邪旅包と拿ふゝ。今ハ浪華ふ止りゝゝゝ。何国ありゝゝ立

越人と。思ひかれど心憎ハ。那檜垣屋の楫五郎あり。這奴悄々地ふ
某乙と。服代許訪告せ〜縛。今ふあひて恨ハ解すいでや怨と
晴さんと。准備の朴刀脩釵横〜へつ。白き手拭ひ〜頗寇〜。衣
の裾と高〜緘。夜の二更ふ歌客と出〜。七草ど住家とべ悄々地
ふ窺ひ寄ろ。寺町の鐘うう〜と撞ハ生滅為楽ぃや生者必滅の
今ふ這里ふ。あり〜も知ぬ這家の朴ヒ草さどら楫五郎。由楽妓弥生
や封市間。呼尻まで居並て酌うち〜たる酒宴の最中。楫五郎ハ那
弥生ど。膝ふ〜れて酒氣芬々〜る。詫ど〜高く打ち〜ひ。いやのふ弥
生ど方ハいまど得も知るまじ。吾親原ハ舊家ふ〜。雄竜丸と喚做
う。世ふ希ある名刀あり。是と賣代あす時ハ。二千金の直高價

あり。最大切の品あるまで。汝ふ見せ〜ずべ〜と。擬廣言と蒔ち〜
しす〜〜と。抜て燭臺の火影へすっと突出を門方ふう窺ふる。
行竜やれ〜す〜〜見ふるまじふうとあき檜垣屋へ賣与べる名
刀く。行竜丁ど門口の戸と蹋放〜て閃り〜と飛入。蛟倉紫它二
郎行龍這處ふあり。觀念せよと罵りあへず楫五郎ど持ち〜。
雄竜の釵と引〜〜。ふるふ〜見へしぶ楫五郎ど。自へそろふ飛散
て。戸いも〜〜と倒ぶ〜〜。七草大ふ慌き恐れ。言ともいとず裏の方へ
逃行呀と行竜ハ飛う〜〜る猛虎の勢ひ。七草ど肩先ふ。豁と
什ともう〜〜ぶんど。切て弃〜る修練の速効。七草ハ叫もの〜ふ二
段ふあつ〜〜疲てぐ〜。ふ〜〜〜ふあり〜〜。這刀ハ。雄竜丸の名刀な

ゆべ。當る所鉄と前。吹毛と斬斫希代の侍品打振うびふ鉾ようう。
陰々ようして雲起り。瞬刃ふ一室中。烟の中ふあるごとく。前後と
矣へさんくろれば。狼狽まとる一家の男女。行竜まする〳〵退く色あく。
弥生ゞ震ひ〳〵逃行所と後ようう大袈裟ふ斬〳〵ようくと刀ふ封
巾間ふ花の足と切倒せば。恰も暴風と倒もとごとく。横さまふ伏ま
ろび。かくとも〳〵わごふ一家の男女。那是すべく七人まで。枕とゆべて死
ぐようう。行竜ハ心の内泰然ようして打ようう〳〵ひ。快やとゆべあふぞうう
お手ふ入雄竜の名刀。足利殿ハ原ようう〳〵て。先祖への怨家ハ今武威
大ふ衰へく。近付よるふ難うう。豫ての念願此名刀て。一回怨とう
へさんとよろこびいさむ不敵の胆腸。徐ふ腰ふさ〳〵昇る。月うげ白

き白波の。うち寄てこそ〳〵る江の。行ゑも知らずありふるう。草
楫五郎們ゞ夏此下ふ話あり〳〵。見る人ようう〳〵察すべし。案下某
不題首説名古小太郎忠孝ハ母袖篠ふ死別き。思ひ出さぬ日しして
もあり〳〵。軌うぬ袖の憂涙時雨あり。秋もすぐ。天文十九年と
明迄り。水無月比ふあるふうう。ふ太郎ハ〳〵思ふ。吾恁
江湖上と巡るうう。天運いまぐうう〳〵ずべうう。王と鞠得ん嗚
呼浮世ふ。浮世うあり。嘆息〳〵。懐旧の。涙うよ〳〵ますうう
やつ〳〵ととととうう〳〵。時ふ六月下旬。莫も半ふ過ぐうう。共
尖き照や炎の空ふ。雲とあく〳〵ぶ遠江ある。阿良井の駅ふ付ふ
うう。悲うふ小太郎ハ。まぐ十七歳壮佼あまべ。旅の労ふ手疲欠

猛ふ身心うるひ出し。道行夏もかうとうれど四十の石ふこ[illegible]
うけて。霎時休て居ゝゝあれど。病いよゝゝさうへふあうぐまこ
堪べうもあゝぐうれべ。阿と一声叫びもあゝぐ。そゞ俺大地
ふ伏倒まゝゝ。又立もあゞ得ど。家隷カニハ悠と見るよう。
驚狼狽て傍ふうけよう。印籠ようり甦薬とゝう出し。小太郎
ふ呑ゝもつぎまゝゝ抱絡あすといへども。さゝふまゝゝ功と見
ず。カニハいよゝゝせんもべ法きぃ。いゝぐれせんと立ゝる所へ。且見
ふゞ向ふの畔路よう。一個の老人歩ゝ来る。そゞ年の比六旬の
上と。七ツ八ツも越ぬゝん。肉疲ゝれども骨逞ゝ。夏の黒ふあと
残うて。肌ハ渋紙ふも似ゝうべゝ。身ふハ麻の半袍と欧見ゆる。柿

色ふゝて申の省ぐうあると著ゝぐゝ。手ふ一挺の鋤を提ゝう。そ
のさま乏少ふゝて仁ふちゝゝ。へつゝひあゝゝて老信ハ小太郎ぐふ
倒まゝゝと。右見左見つカニふ向ひ。ようと奴さま這荘佼ハ何ゆハ悠ハ
路の辺ふ倒まゝゝ起もあうハぐうゝ。問バカニハ額と撫つ。いや衙
主客ハ嚮あどうう。猛可ふ勢の出来ゝゝ。悠路傍ふ打卧て苦ゝ
うて起ゆハず。夏の日ふ緩閑ゝうで。今日も日暮ふ最近ゝう。願
ふハ老人這四辺ふ。ようべき歇客屋あゝべ。焉てゝべと問ゝくれべ。
那老人答ていふやう。這駅ふハ歇客屋の。最多ゝくも有といへども。
そハまゝゝ市中真中ふゝて。這里よゝうまぐ十余三町。その病足でハ。
歇客屋まで。行うて易きといふふハあゝず。小可ぐ拙宅ハ。這里よう

へ一町ぞうろ。ろ〜かうずバ今宵ハ吾家ふ一夜とあう〜ゐひ
ねう〜。ふ可ゞ名ハ角郎兵衛と喚做せう。のゝよう歌客といこ
さゝ。今宵ハ即亡霊の。忌日ふあ〜うひゆ。偶さまへの追ふく
ふ心ぞうう菩提心。許諾ふうやま〜といへバ。カニハ大ふ喜
びてふ腰とかゞめ〜ヤヤう。そんあうゞこき善志。仰うけぞうひ
あう。ふて。即時ふ主の小太郎と。カニゞ肩ふ背おひて。角郎兵衛
ふ誘ひ。稍歩支一里ぞう。忽ち一軒の藁葺ある軒端ふあそん
来うう。登首〜も角郎兵衛ハ。咳〜ふく家ふいう。やよ舟九蔵
ハ何處ふ居ゐ。今日ハたう〜ふず新客人と。誘ふ〜ふ入り〜ふ。まづ
奥亮ととうかゞづけ。尊客人といまう〜せ。早く夕膳の准備と

せずやと。ちゝる言ふ角郎兵衛ゞ舟九蔵そゞ妻ある阿壷も共
ふ出て来つ。カニふ江湖通の情義〜て。ふ太郎ハ病体〜ゐるとゆて。
まづそゞまく〜ふ奥ふ早いま。早夕膳の准備とあ〜ね。カニハ始終ふ
太郎ふ心くま多〜小心〜て。紹抱等閑あ〜さう〜ゐ。恁て其夜
も夕膳おう。ふの〜眠ふ付ゐるふ。翌る朝ふ至る。小太郎ハ心と
やふ〜て。そゞわあハ似ずといへども。又ちや苦〜む体も見へず。主
僕ハ主ゞ懇切とゆう〜ゞ支一う〜あ〜ふ。其日ふ発足せんとすれバ
角郎兵衛も九蔵も。強て滞留とすゝむるふゞ。ふ太郎も心のうち
無理〜とハあ〜ゐうあんとて。登夜も止りと定めゐう。九蔵ハそれ
ゆうも氣加ふ些の要備あゐうとて。亭午の比ゆう出ゐう〜ふ。夕

白めんくらべ

れるうけいひろえろうの玉川や
白面圓通示現貴月要望
おれもどくろる面をやわら業
講中世話人
ほくじん
りんぢ
小大ろ

晨方ふと来る。首言小太郎ぐ前ふ来く。最いとも〜〜いとも〜〜
へ原来尊客人聽ふへ世ふ尊き珍説奇妙の縁もあれべあるもの
うふ。まづ一通り聽ねう〜〜。今日〜〜も小可氣加ふ行〜〜ふ。那里
ふ多くの人集り。呼々捌と結び。棚の上ふへ青銅數十貫積〜〜
もあり。まづへ米と積〜〜もあり。人東西ふ奔走〜〜て。賑しきと
たぐひもあ〜〜ず。小可心中不審。四下の人ふうち向ひ。此と〜〜ふへ
何由へふ恁へ大勢寄集ひ。青銅さへ米さへ沢山そふ捌ふあげ〜〜山
何夏ぞやと鞫ふそれべ一の漢子最〜〜〜焉ていふ。和郎へ
いまぐ此活傍の噂と知らずふ居ら〜〜や。此比化道寺の觀世音一夜
の内ふ失ふ〜〜。こへ不測と一寺の僧人。這里や那里と鞫ふ〜〜も

又あり。もせぐ〜〜呼ふ。或日一名のうぐそ〜〜来り。化道寺の僧
ふやうるへ小可へ西国方のものく〜ぶ。昨日這高師山の麓と通り
〜ふ山の嶺ふ當つく。靈々〜〜て光明あり。最いぶう〜〜思
〜うゆへ光と鞫て上つ〜〜見まべ。身の長凡四尺四五寸。五尺ふへ
足ざうる。白面の觀世音最尊も立居ふ。拜せんとすふ
光明の眼と遮り身と照〜て。尊さいふべ〜もひくずと。告と
うるれべ寺僧の面々。そへ失〜〜う〜〜觀世音の頓ふうらせふひ
〜ふ〜〜ん。然いあるまで失〜〜う〜〜。觀世音へ壹尺八寸。金泊おさの
木偶ありき。今まで身の長四尺の余あ〜〜。そへ心得ぬ夏ぞう。
行て拜べ緯分明ふ〜〜〜もせんと打つまぐち行て見まべ境

不測や。優婆塞が云しにたがはず。身の長四尺四五寸なる。白面の観音へ。紫雲平日に五体を包み。髪頭の中より光々と見ゆるは光明なるべし。それのみならず。音声の微妙なる。細々長々として鶯の囀に似たり。観音自那優婆塞に言吏数回。寺僧いよいよ感心し。随喜の涙胆にめいじ。早一身の宝輦をそなへ。勿体なくも那活菩薩を乗まひらせ。下山して。扨病人など有時は。米にまれ銭にまれ備て祈まゐらして。功顕なしといふ吏なし。元より活菩薩さまなれども。供する所の東西何にまれ。ッとして召食ならず。且また示して宣はく。具足神通力廣修智方便十方諸国土無刹不現身。普く世界を環歴して。生老病死苦をすくふべし。是廣大智慧観

と最尊くも示させたまへれば。寺僧們は。那優婆塞を導師として。宝輦を舁のちて。すぐに這里まできたりたまふ。此故に我らかく。供物を備て待なりしに。やがてかく小可も。いよいよ奇異の思ひは止ず。いざ那宝輦を。一回拝まつらんと。待吏およそ半ときばかりにして。宝輦来つ。踏の傍に跪き。称名を号ること異口同音。仰で宝輦を拝み奉るに霊々として白青き。光明廣の外に輝き。異香四方馥郁として。まことさ云べうもあらず。翌日は這地へ来光あるべし。世にありがたき吏ならずや。客人幸に病疾のいまだ全く愉たまはず。翌日まで待て那活菩薩に病を祈らせたまへ。忽地全快したまはんと。最老信ですすめける

第廿回　孝子玉と尋て白面観音を視る

小太郎ハ肚の裏ふ法〳〵と思ふやう。それ章提希の覚ふも那経文ハ當分の緯とたとへて。衆生と渡し。又られ佛智と覚ふあ〳〵。鄙言も正法ふハ不測ふ〳〵といふ支あり。非除不測の有ふも世よ。そハまゝと支ふもよるのゑ。能言能歩観音ありといふとハ。無垢の世界ハいざ知らず。這世ふある支さらふ聴む。思ふふ白面観音ハ。似而者の為所ふして。人と欺く術ふやあらん。心得〳〵ときハ光明へ免まれ角まれ習日までまちて。観音ハの化口と見顕〳〵て呉んどりのと。心の内ふ思案〳〵。九蔵ふ向つて云やう。そハ尊かるとあるふ。ねご〳〵てもふき倖ふきゞ。無礼ふ似

うれど今一日。寄宿を許〳〵ふるゝ。活観音と拝むべし。あゝ尊や有測やと。心の笑ふ空ごのめ。たのゝす〳〵ふき旅路ふハ。好欝晴〳〵と思ひゝり。去かどふ登あゝる日。先ぶれの使あり。活偶白面観音這地へ渡御あるべし〳〵て。荘官うゝまゝ告來ゝる。這地の荘官根津井稲六ふゝやうふ當駅の貴賤とゝらまずめ〳〵集へ。下知と傳てヤやう。活偶ハ今日あん這地へ來臨まゝ〳〵ますちづあゝべ。迎の人夫と遣すべし。甲乙ハ宝輦と舁。丙丁ハ雑具と舁べし。必ゝと無未ふ思ふべゝ〳〵。涙罰たちどゝろふ至るべし。吾も直さま迎ふべし。心得ゝるうと荘官ぶ言と待ず愚民ども。誰ゝ一個もいそぐざゝ〳〵早く迎ふゝ。活偶の大慈大悲と蒙るべし。あゝ有測や尊やと。謁

仰の涙と共に迎ひ奉るに出こゝろ。恁り〳〵わゞに白面観
音。黄金つくりの宝輦に召し。四方に錦の帷とたれ。珊瑚珎
瑙の纓絡へまゞめきまして日に映じ。幢幡四流鐘鉦數十張附
従する道俗男女珠數をつまぐり鈴を振て。詠哥とゝなへ宝名
と称し。風擁して推行ぞ。れも〳〵と観音を拜んものと嚮と
あらそひ。路の傍に香を焼。花を供じて。出迎へつ。称名詠哥數十
里に和鳴して。最賑〳〵き支あり〳〵。一町ばかり引さゞり。烏
髪の道人優婆塞婆羅盡身に嵐色の衣を著し。手に金剛珠
數を執て。高き木履を踏。称名〳〵て相従ふ。そのさま堂々〳〵て
志を得つ。凡人あらずと見へ。既に〳〵て活芽の宝輦は早

這駅あり。本青寺と唤做。彝寺に入奉る。這時既に黄晨方に
て。程もあらせず老少男女。我も〳〵と衆詣し。呼吸まで立
列並居列並異口同音の称名。天に響き地に裏き。梵是ぐ〳〵
に壊れ。人息是ぐ〳〵と云。最殊勝にもありがたし。恁る群
集のそゞ中へ名古小太郎忠孝。角郎兵衛に誘引せられ。奴隷力二
も共侶に。群て白面観音と。拜まんものと並居こゝ。其時烏髪の
婆羅盡ハたゞ高床にのぼりて。最大音に法花経の普門品を讀
誦する。声〳〵に群集よう。我も〳〵と諸声高く異口同
音に讀誦こゝ。要時して那婆羅盡。衆人に打向ひ。それ観音
の大慈ある設入大火火不能焼。大水所漂称其名号即得淺処。脱

べし。おのゝ〻其の慈悲黄大なる。拳てのぐるふいとまあらず。百言を
ゞ一二と是這ふ説べ。昔田村將軍ハ。鈴鹿の鬼畜と退治のあり。滝東
清水寺の觀音ふ。祈誓とうけて向られゝとべ。念彼觀音の力
と以て。無怨頓ふ悉退散。大悲の弓ふ智慧の箭と。さゝ〻〻傳く射
るべ。その箭ハ雨や雹と降て。悪鬼ハ忽地退きぬ。〻〻汝石集ふ觀
音の霊驗あると書られゝ。往時樵夫一個あり。一時山ふ入て薪を刈
と。朝まゝきふ立出つ。深山の谷ふ至りゝふ。誤て細谷川の千尋の
底へ遠近の喚ども誰ろ答ふべき。谷響ふひゞ〻音のゝみゝ。風のびん
ぎもあゝざろゝ。那樵夫ハ嘆息ゝゝ。観音觀音の称宝号とゝ多
へ。端座ゝて居ゝろゝ所ふ。あゝ恐ろゝや奥山の奥ふ巖根と動ゝ

て。一陣ふ臭風さつと吹起り。長登二十餘丈の大虵遥の上ろう頭ゝ
出ゝ口と開て。魯一呑ふ。呑んとかゝるを那樵夫ハ持ゝる利鎌を一
ゝやくゝ。大虵の頭ふ丁と打て。其柄を楚と持ゝるゝ。毫も放さ
ざろゝれべ。喘吐と大虵ハ頭を上へ引あゞる手も一生縣命。計す
原の所へ上つゝ。大虵ハそゞ儘去ふろう。那樵夫ハいぶゝゝさまゝ
つべらもあゝざろゝれべ。即時ふ吾家ふ立入り。そゞ母ふよし
告。不測の命をたすろゝ。偏ふ芋の霊驗あゝんと。思ひろれ
べ法花經と。拿出ゝつ讀誦とるふ。毒龍諸鬼等。念彼觀音力。
時悉不敢害若悪獸囲繞利牙爪可怖念彼觀音力。疾走無辺方
蚖虵及蝮蝎とつふ所ふ至つゝ。虵の字ふ利鎌の跡のろう。血鮮班

ふ深くうるれば。譙夫は頓ふ黒衣とあり。宅を舎て寺とあり。救力とさらに感愁せうと。それのあるで観世の霊験救力は最多く。世俗の皆知所べ。そのうれ人作の金傍く。今尊くもうるせるふ。観音世の霊功は。祈所何ふまれ。かあるどしふ夏あり。金と以て得度せべきものふ。即世の身と現じ。そが為ふ説法。辟支傍身と以て得度せべきものふ即辟支傍身と。現じてあふ説法。声聞身して得度せべきものふ即声聞身と現じてあふ説法。梵王身として得度すべきものふ即梵王身と現じてあふ

説法す今這白面観音は。活世の身と顕し。衆生のあるふ説法す今末法の代ふおよび。下根下智あるものの為ふは。かくふ奇ぶくと顕さずんば。いかぐ理深解微すべきや。衆詣の衆人たち。金と弃財と擲て。傍のうふ結縁せよ。今の衆生は下根ふして。傍と信じて功薄し。啻財と擲るふ。大小多少は論ずべうらず。未来の障ち金銭と。投て傍ふ利益とうけよ。今もて精篭を巡らすべし。辟の内ふ雑備衆の人々早くも立出つ。手ふ〳〵精篭打ふうて。衆詣人のそが中と。竪ふ。横ふ猟狩うて。傍ふ結縁を焉ふ。我も〳〵と銭と投げ。信仰せざるは一個もあ〳〵。見るぶ内ふ精篭の内数十貫ふぞ及びうう。恁て雑備衆の人侶も。捎内陣ふ退きうれば。その首

眞圓通罰假圓通
小幸人

白見之丸

優婆塞婆羅盡ハ。諸衆詣ふ向ていふゆう。各々いしくも活傍ふ。好結縁とせられう。今ここそ活らる白面の觀世音と拜すべし。何もも心ふ信仰して。そゞ御利益と拜とぶべし。あゝ尊や有がさやと。大音声ふ呼上る。称名の声いくむくあつて前ふうけらる御帷帳と雲の霞と捲ごとく。おろしく身の長およそ四尺四五寸。肌ハ白玉と磨ごとく。胸ふ珊瑚琉璃の瓔珞とひらとうけ。右の手ふハ錫杖と突。左の手ふハ黄金ふて作りし一ツの蓮花と携へ。端然として立らる有さま。粉と施ざる面貌。妖艶と嬋娟ふして。海棠の雨と含。引かゞやらる春霞の。半天ふ掃ごとく。天津乙女の袖とうへ。衣通姫も避て驚く。當ふ安養浄土の教主補陀洛山の宝來迎頭髪代ようり見々とひうり出らる光明ハ十方国土ハ照さざれども。所尺まで並居らるし。衆諸の衆人們嘘唏尊や有測や。魚等々阿耨多羅三藐三菩提心と。異口同音ふ合掌し。念壱妥時ハ止ざるうり。登時白面観音ハ閉らる眼と打ひらく。右りと。左ごとのぞく。巖より涼しく声音わく。舎利弗ハ花光如來。迦葉ハ光明如來。須菩提ハ名扣如來。迦禅延閻浮那提ハ金光如來。目連ハ多摩羅跋檀香傍冨樓那ハ法名如來。阿難ハ山海恵自在通王如來。羅睺羅ハ闍七宝花如來。憍陳如等の五百七百人ハ。普明如來。学無覚の二千人ハ宝相如來。憍曇弥等の六千人の比丘尼ハ。一切衆生喜見如來。耶輸陀羅の比丘尼ハ具足千万光相如來。提婆達多ハ天王如來。又

龍宮界の婆竭羅龍王の娘八年八歳にして生をもうけど。即座に南方無垢世界の成道とらげうんや。吾今下根の姿と顕し。無智なる衆生を教化のうち。不測を爰に見せべきうとて。那白面観世音。一宝咒をむすびるへば。忽然うてそぐ形一寸八歩の御姿と成て小き厨子の中へ飛入て小然と。蓮座の上に立給へば。見る人ますく感声を出して。有測うさる者一人もあらうう。要時あらく観音は嚢の風と哺ぐ〻く。見ぐ門に又忽然と。原の形にうつり給ひ。衆生に向つて宣く。人傍休に近て。祈は必ず浄土に生ず。僧を桑門と云開士と称と。又大蔵一覧に。徳士とも号うう。尊勝経の語を知ずや。僧を恭慕といふ。本是草の名にして五の義あり。一に生苔ず

二に冬夏常に青し。三に性體柔軟。四に香氣遠聞。五に蔓と引條と布うや。摩訶般若経に。阿育菩提心と行ふ是と上人と名へり。沙門に三の行あり。爲座禅上輩うう。誦経を中輩うう助衆生下輩うう。又遠宛ぐ漢記に曰。沙門漢に言息也。羞息欲而帰無為。又傳灯録に曰。禅有五有九夫禅有外道禅有小乗禅有大乗禅有最上乗禅吾今姿と小にせうへ。仙術に似て術にあらず。即傍の法力。昔後漢の費長房。汝南郡の市掾とある這地に一個の老翁あり。市に肆うして薬と賣。平日に一壺と肆頭に掛。市罷ば即ち壺中に入。人これを見るものあり。惟長房のみ樓上にて。獨此不測と覩て甚是と異うう。即往て再拜して。酒と脯うと奉る。翁乃

俱ふく等童の中ふ入るふ玉堂厳蘿ゝて。旨酒甘肴其中ふ盈衍す。長房へそれとうゝて。那老翁ふ教とうけつ。終ふ昇て仙とあるそ。吾法力も擬すれど。又那翁ゞゝゞゞひふあゝず。老て死せざると仙と いゝ。仙へ迁ゝ迁て山ふ入。故ふ文字と制もるふ人の傍ふ山とゝゝゝ。又傍へ死ゝて死せず。人わゝて人ふあゝず。故ふ文字と制するふ人の傍ふ弗と書。我すゝ多造堂寺堅固の時薬師如来と共侶ふ南岳天台と名乗つ。陣隨二代ふ顕ゝう。今這日本稍乱も解脱堅固の衆生少く。人の意詞曲ゝて。真ふ傍と信ずる衆生へ又あと少き末世ゝ。ふうへあるとゞも吾法徳。天竺震旦日本ふ施ゝ行ざる所あゝ。是ぞ一切衆生の往生すべき澄観。知らずや観経ふ説て曰く。五逆十悪具諸不善。又無量寿経の十八願ふ曰く。設我得傍十方衆生至心ふ信楽ゝて。欲生我国乃至十念若不生者不取正覚同三十五之願ふ変成男子とも説出せり。無人疑ふ支ありれと。宜ふ声音へ心と蕩ゝ。又も宝兜と称へ人ゞ蔭々ゝゝて紫雲起り。香の白りの馥郁と。四下ふ散ゞ御帷帳へ再びもりて観音の姿へ見へざりるふ其首件の優婆塞へ叅詣人ふ打向ひ各々何まも病ふ有人へのゝゝず跡ふ止り。芋の御加持と受ふ人。利益へ立所ふあるぞゝゝ。呼ゝる言ふ衆人們へかゝもあり止るもあゝ。座中只管ざゝゝゝゝゝ。畢竟是よりいゝある物語ゝある。そへ第三輯二十一回ふ説出すと閉ねゝゝ

白面觀音の始末。本輯にのべんと思へども、いかにせん毎輯紙數に
定限あれバ遺感ながら筆を止るのみ。第三輯の始よりの物語
ますく佳境にいりく。右玉冠蜂起一段ハ本傳の関目なれバ
四方の諸君子第三輯の出るをまちく趣向の新奇を御評
判々々々

[illegible]

女訓姿見　女大学訓躾種　繪 全一冊　手嶋堵庵先生述

手嶋堵庵先生ハ心学をもつて世に名高し。此女大学訓ハ女子
七才より十二才までの内に知べき事どもを第一ハ大女
して淫乱妬を慎み、父母夫に仕へ孝貞の道を説て、夫を以て評を退
賢妻節倹を守り操を正しくすることをよく諭し、本朝
往昔より名高き賢女節婦の傳をあげ、
婚礼の式、化粧の法、子を育つる事、衣服を着る心得、
男女相性、名頭字をくはしくし、
文字二十六種の教訓并その外女子に為となる事ども
数ケ条、手嶋先生ふかく心を尽し、初稚き者の為

安くおりぐく縫入ふして文を書て
人子ふ去さ先くれば先くべ婦女の教訓に淑女書
に書幼稚より一代ふ代ふ教さんべして淑女の
雪先べして婦徳と備へる。大ひに有益の書なり

心學五則　全壹冊　篠田柳弘先生作

人倫に正法とて。持敬積仁知令設知長書の五則と
いふ。學ばざれば是れ幼稚なり。故に先生五則の
人もちろん。夫に平かもろ和解。兄弟は時より善とすべ
仁義に道と知る。自ら質素節儉と慎ひ主身出世すべ
義治とし。世上善比の長なり

釋尊御一代記圖會　全部六冊

浪華　山田意齋叟參考
前北齋老人圖画

釋迦如来の御父浄飯大王の御即位と鼓端と橋曇彌摩耶両夫人の内
如来摩耶夫人の胎内ふ生と託しの事橋曇彌夫人摩耶と姙て胎内の
王子の出生ふ成ふ人と道師ふ呪詛せしむる條如来夢中の説法ふ母の子息
と鋭の夷浄飯王藍毘尼園ふ花の宴と催しの悉達太子延生の奇瑞
悉達太子御幼稚より菩提心と發しの謂釈迦提婆遺恨の始悉達太
子宮中と出て檀特雪山ふ難行しの正覚成道して出山し衆生と濟度
の夷迦葉舎利弗目蓮及諸羅漢佛弟子成和解耶愉陀羅女の貞心
提婆が十悪須達月蓋西長者の信心流離王の暴悪釈尊御入滅五妙
神力涅槃像の終まで都て如来御一代の事と記し圖と加う雖有續水也

浪花　好華堂主人著編

大伴金道忠孝圖會

全部十冊近刻

此書ハ天智天皇の御宇ニ百済國援の兵を遣されし事を首とし涯大臣ヶ燈臺鬼と成し謂大伴真鳥元と討て家國を押領せし奸悪大友皇子浄見原天皇と御合戦の次第金道の生立白虫太郎の忠義雅明が義心真鳥の香着投金道万苦を凌て父乃仇を復し本領ニ安堵せし迄の奇事を洩さず記せし実録ニて勿論夫々ニ繪を加へ善を勧め悪を懲しと便とも面白き新本也

同上

扶桑皇統記圖會

全部十冊近刻

此書ハ人皇四十代天武天皇の御治世より六十代醍醐天皇の御宇迄の公事の根元宮殿寺院の草創代々の人物の行条を紀せし所謂役行者安部仲丸吉備大臣衣通姫光明皇后良弁僧正弓削道鏡恵美押勝中将姫傳教大師弘法大師田村丸浦嶋が子小野篁在原行平業平小野小町僧正遍照菅丞相其外古人の実傳を探て精く輯録し悉く圖画を加へ重宝の書也

王樂

かぜのかんくすり

薬の名を　正眞保赤圓

一包　二百
半包　百
小包　五十

そもそも此の新薬ハ小児疳を長寿のよふにかなふくて蟲におぬ丸薬くれ小児の用ある薬昔より世の中に多しといへど唯當座しのぎの薬法にて後々の為に宜からず又癒えによりて又ひき返しなどありて都て病にきまりて苦しむもの多し医者ハ既にその意を知りて小児科を業として種々の妙薬を調へて億萬の小児の病ひを治しさる經験あり其中にも此の保赤圓ハ他家に無類の良薬にて小児救命の最第一とし殊に此の薬ハ食物消化薬にさし合なく小児の病の妙法なりさればすべて薬の功にして効ある方のれ公済より小児方の苦痛をすみやかに除んと願ふものなり第一▲又かんきを煩らふぴくぴくするどくぴくり。ふかく驚きてにめらひてしん功神丸なし

▲よる寝いらず▲かうご手足冷ゆへ▲そらをみつめ▲歯がみをしめ▲そり▲物におびへ驚きやすく▲手足ふるへ▲ちゑおそく▲ふくるゝ▲あくびせり▲腹がかゝへ腹をいたがり▲持病ありて歯を見せ▲歯ぎしりをする▲腹へさしこみ▲くわえ▲よだれをたらし▲物を吐▲むしおちきりて▲いたみまく▲食物にかれとうへ▲きれのくして物いはぬ▲あまひ夜半の泣きしたりむく▲めをとおそひらかぬ▲ちんぶうをおこる▲すくかる▲おさ乳をのまで▲口をかき▲めにそしくもいで文▲ちゝ口をおさへ▲乳を吐く▲おなかのいたみなくなり▲きみなくかくいしめて▲はらいたむ▲かほのいろあをく▲ゆたかにはらへて▲なにやらにさゝへ▲ふしよく▲しきりにのどかわく▲ちうやなき